

面の一隅にでも村民（村外者も）の意見発表の欄の新設 ●経費節減のためにも郵送料の負担をしてもらう...の二つの希望意見を申し上げますので、ご検討ください。これからは楽しい広報いわむろのますますの発展を祈念してやみません。

### 岩室村はわたしの第二の故郷です

西潟 和雄さん(63歳)



住所 / 新潟市五十嵐一の町6489-7  
職業 / 無職 (元岩室小学校長)  
出身地 / 中蒲原郡村松町

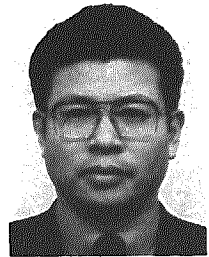
「広報いわむろ」三百号の発行、心からお祝い申し上げます。岩室村は、わたしにとって第二の故郷と言っても過言ではありません。それは、教職生活四十年間の最後の三年間を村民の皆様のおかげに接しながら、しかも有意義に楽しく過ごさせていただいたからです。

月一回の広報を拝見しながら、岩室村がどのように発展しているだろうか、どんな文化財が、村民の皆さんの活動は、岩室の子供たちはなど、往時を偲んでいる昨今です。『広報』に対する要望を一つ二つ書かせていただけるなら、「時の人との

インタビュー」「文芸欄」などあつてもよいと思います。最後に岩室村のますますの発展と広報の内容充実を祈念いたします。

### 子供らに「夢」を与える古里に

本間 靖夫さん(48歳)



住所 / 東京都町田市相原町1707-15  
職業 / 読売新聞社勤務  
出身地 / 岡瀬7区

広報いわむろ三百号おめでとうございます。マスコミに勤める身としても、村の交流に役買っているミニコミ紙を読むのは、いつも楽しい。とくに、毎号の一面トップを飾る村の写真は、懐かしい故郷の匂いを運んで来てくれる。

しかし、チェルノブイリ原発事故以来、この風景への不安がつのるようになった。出版物を読むと、「わずかに粒で肺ガンをひき起こすプルトニウムは、自然には存在しないが、原発で作られると安全になるまで何十万年もか

かる」「クリプトンという放射能を持つたガスは、空気中に放出するしかない」「現代の工業的技術で一〇〇パーセント絶対に安全はないから、いつかは事故が起きる」などなどある。「巻原発ができたら、田舎になんか絶対に行かないよ」と言っている子供たちのそばで、大変寂しい思いをしています。エイズからは自分で身を守るが、身に降る「放射能」はぬぐえない。

### 広報いわむろは出稼ぎ者の心の支え

高橋 隆磨さん(56歳)



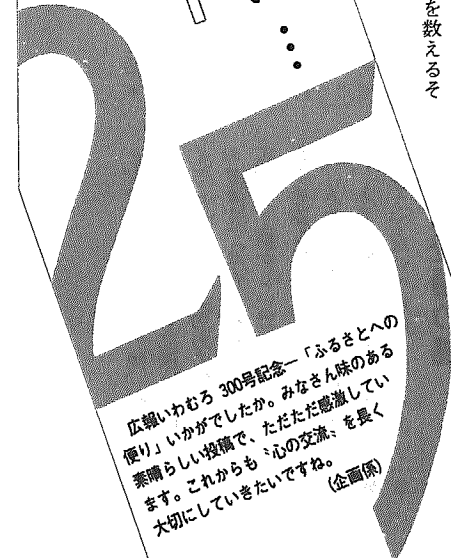
住所 / 北海道釧路市住吉1-6-12  
職業 / 漁業  
出身地 / 岡瀬5区

月に一回送られて来る「広報いわむろ」も二十五年間で三百号を数えるそ

うで、企画編集されている皆様には、まずもってお礼を申し上げます。わたしのように出稼ぎをして数十年も村を離れておられますと、どうしても村のニュースに乏しくなりがちで、「広報いわむろ」に目を通すのが、月に一度の何よりの楽しみみです。子供のころ遊び回った海や山の面影がその都度、強烈によみがえり、今の子供たちはどんな遊びをしているだろうか、あそこの先輩は元気だろうかなどと、出漁中には無線を使って村の関係者と話合っています。

月に一回、定期的に届く「広報いわむろ」が、わたしたち出稼者にとってどれだけ心の支えになっているか計り知れません。今度ぜひ、海から写した岡瀬の全景などを載せていただけないものではないでしょうか。最後になりますが、村のますますの発展と村民の皆様のご幸せを祈っております。

元して未来へ...



「ふるさとへの便り」いかがでしたか。みなさん味のある素晴らしい投稿で、ただただ感謝しています。これからも心の交流、を長く大切にしていきたいです。(企画係)



声の広報員 藤田勢津子さん (和納3区・54歳)

わたしが声の広報を始めたきっかけは、確か九年ほど前になります。広報いわむろで「声の広報ボランティア」を募集したことがあり、そのと

き応募したのが始まりです。むかし(昭和三十三年ころ)、松下電器の宣伝部に勤めていたことがあり、そのころ宣伝カーに乗って県内の各地をPRをしながら回っていた実績(藤田さんは、アナウンスをしていました)があつたことや、何か皆さんの役に立てれば、という気持ちがあつたからです。もう十年近くもやっています。なかなか納得のいく吹き込みが出来なくて困っています。毎月、聴いてくださる皆さんに「すみません」と心の中で謝っています。録音はだいたい日曜日の午後からやっています。三十分のテープにたっぷり

と二〜三時間は費やします。一ページを吹き込んだり、また聴き直して、それを十数回も繰り返すためです。それだけ集中的にやるものだから、部屋のハト時計の音まで一緒に録音されて、広川さんから「藤田さんのお宅はハト時計ですね」なんて、からかわれたりしたこともありましたが、でも目の不自由な皆さんが、わたしの吹き込んだテープを心待ちにしてくれていると思うと、いつもがんばらなくっちゃ、と額に汗しながらやっています。これからもライフワークの一つとして、皆さんの役に立てれば本当にうれしいことです。

### 声の広報ボランティア

## 支える人たち

### 点字広報ボランティア

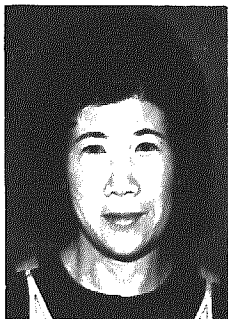
昭和五十五年から点字広報のお手伝いをしていました。それまでは、わたしの先生であつた故・荒川清さんが四十七年ころから始めておられたのですが、先生が亡くなられたため、わたしのところが依頼が来たのです。荒川先生のように熟達な点訳が出来ないので、いつも目の不自由な皆さんにご迷惑をおかけしているのではないかと心配です。そのうえ、気分屋なものですから、十数ページにわたる広報を全部点訳できず、必要な箇所だけ抜すいさせてもらっています。そんなわけで、外から見ると本人は、負担だなんて思つた

ことはありません。ただ、点字は点字板という器具を使って、紙に直接くぼみをつけていくものから(読む人は逆に裏側に出来た突き出た部分を読みます)、間違つたからといって、消しゴムのように簡単に修正が効かない点が緊張するところ。また点字には漢字というものがありませんので、「目で見て読む」ということができません。同じ読み方の漢字がある場合なんか本当に困りますね。一応、県の認定証(点字の)はいただいているのですが、出来上がった点字広報はお粗末で、毎月読んでくださる皆さんに「すまない」と思つ

「広報いわむろ」は、みなさんのお手元に毎月届けられるこのようなスタイルのものが、ふつうだと思われていることでしょうか。実は本紙には、もう二つ、別の広報があります。それは、目の不自由なみなさん(五人の方です)へ特別に届けられる「声の広報と点字広報」です。声の広報は、カセットテープに全ページの記事を吹き込み、そ

してそれを聞いてもらうものです。一方、点字広報はご存知のように点字に翻訳したものを手で読んでもらうものです。この二つの第二の広報づくりには、ボランティアのみならず協力してもらっています。今号では、通巻三百号記念の第三弾として、広報いわむろを影で支えていく二人のボランティアのかたをご紹介します。

ています。でも、こんな点字広報でも読んでくれる皆さんのために、わたしの微力がお役に立てればうれしいですね。



点字広報員 柏原朝子さん (弥彦村2区・54歳)